NPO JCP
Japan Conservation Project

NPO JCP NEWS

No. 14 2006. 9.10

・関西支部設立について
・報告　海の日記念講演会　伊万里湾の海底に歴史を探る～海に眠る元寇の跡
・保存修復の現場から　生産環境を整えないと綺麗な物はできません
　冷凍庫で殺虫処理～家でもできる簡易低温殺菌法～
・JCP 事務局通信
・書籍紹介『古典籍の装幀と造本』

今年のスタディツァーは

THAILAND

タイ・アユタヤ遺跡

関西支部設立について

□関西支部設立の理由

平成13年2月に東京でNPO文化財保存支援機構が設立されて以来、私達は当機構の果たすべき様々な活動の一環として、現状に困っている方々への支援活動を行い、多くの成果を収めてまいりました。今後、当機構がNPOとして担ってゆかなければならない重要な役割は、これまでの活動に加え、「限界のある現在の文化財を護る為の枠組みを補完する、新しい方法を社会に提案し実践する事」だと私たちは考えています。

特定の専門家だけではなく、様々な分野も含めて広く協力し合い、ひいては一般の人たちまで巻き込んだ「文化財保存の活動」。それこそが今の枠組みを超えて、現在足りていない部分を補完できるの方法であると信じています。そうした使命を果たすためには、近年の会員の構成と活動範囲が全国に広がってきている現状を踏まえ、これまでの全国組織的な機構の体制をより緻密な活動しやすい形にしていかなければならない時期にきています。

例えば、何らかの問題解決を行う際に、全国に分散在住している各分野の専門家より多方面からの意見を収集するといった点では、現在の全国組織的な会（機構）のあり方が有効であり効果的です。しかし、共に詳細な意見交換をしたり、一般に啓蒙活動をしたりといった緻密な活動をするには、人と人が直接顔を合わせて話をする必要があります。いえ、むしろそこからしか始まらないというのがここまで活動してきた実感です。そういう意味に於いて物理的な距離は大きな障害になってしまいます。

一方、この2年、私たちは東洋書画資料ワーキンググループとして活動をしてきました。それは主に依頼された事業を円滑にこなすために発足させた訳ですが、その活動を通じて先に述べた様な感触を強くし、どうすればその部分が改善できるかを模索してきました。

□東洋書画資料ワーキンググループの実績

これまでの東洋書画資料ワーキンググループでは、平成16年度に「寂光院所蔵書画文化財クリニック事業」、「大樹寺天井工事に伴う障壁画の梱包及び運搬作業事業」。平成17年度には「大覚寺宸殿襖絵応急修理事業」などの事業を行ってきました。例えば、「寂光院所蔵書画文化財クリニック事業」では、寂光院所蔵の未指定文化財の総合調査及び修理設計　応急処置を事業の目的として、延べ70名あまりの会員や学生さんが関わり、事業を進めることができました。また、「大覚寺宸殿襖絵応急修理事業」では当機構の登録会員を中心として、文化遺産の保存に貢献できただけではなく、参加者同士の知識交流や技術交流も実現できました。こうした東洋書画資料ワーキンググループの活動実績は非常に高い評価をいただいております。

このグループは幸か不幸か、地域的会員構成の偏りから関西を中心としたものとなっています。しかし、その点はある意味で上記課題解決のヒントにもなりました。それは、全国組織としての機構の下にそれぞれ地域的な活動をする支部を置けば、こうした地域的な活動を通して社会に働きかけを行っていくことが可能になるのではないかということなのです。

こうした理由の為、このたび、関西支部を立ち上げることになりました。その形式は東洋書画資料ワーキンググループを発展的解消し、その他の分野も含んだ関西を中心としたものです。また、それは、これまで「東洋書画資料ワーキンググループ」の活動枠組みである、「東洋書画資料」という区切りを無くし、文化財全般を視野に入れ、地縁的な活動を軸に展開するという意味も含んでいます。

もちろん私たちは決してこれで全国から発せられる問題解決に、十分な体制を取っているとは考えてはおりません。しかし、残念ながら、現状の会員数から見てすぐにあちらこちらに支部を置くようなことはできません。まずは地域支部の一つ目の試みとして行っていき、将来につなげたいと考えております。その意味で関西支部の立ち上げは当機構の新たなステップをひとつ登ることと言えるでしょう。

□活動の独立と連携

地域的な活動を実践していく場合、それぞれの支部がある程度独立した動きをすることは重要です。そうでなければ、迅速且つ適切な対応が十分にできません。今後はその活動の性質に合わせて、東京本

部と連携をしながら、ある程度の独立性をもった活動を行っていく予定です。

□関西支部の活動予定

今後は関西支部として、よりいっそうの発展を期待する為に、これまでの当機構が本来得意としている分野の事業の拡大やさらに新しい分野への事業展開を目指し、また会員の皆様の専門性をより活かせる活動を行っていきたいと考えています。例えばこれまで関西圏では十分な例会を開催することができませんでしたが、関西支部の開設により、関西圏でも例会を開催していきたいと考えています。

□第１回目の関西支部の例会の開催

具体的な日程は今後事務所の開設とあわせて、準備を行っていく予定ですが、まず第１回目の関西支部の例会として、事業報告会を平成19年１月14日（日曜日）にキャンパスプラザ京都（JR京都駅前）にて関西支部設立記念を兼ねた形で開催する予定にしています。この報告会では、主に関西地域の会員の皆さんに、これまでの５年間のJCPの活動報告と、今後の活動について皆様と充実した意見交換ができることを目的としております。詳細が決まり次第、会員の皆様にはご案内を差し上げたいと考えていますが、ぜひとも多くの方にご参加くださいまして屈託のないご意見を頂戴できますことを願っております。

寂光院所蔵書画文化財クリニック事業

□最後に

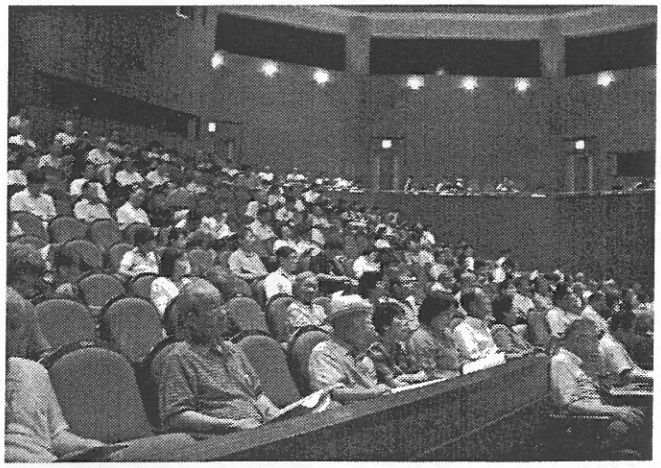
関西支部設立により、これまで、当機構への活動に参加したくても立地上困難であった西日本にご在住の会員の方への機会を増やすとともに、東京本部と関西支部の二つの拠点を軸に、当機構のより充実した体制を整えられるよう努力してゆく所存ですので、皆様のご支援ご鞭撻の程、何卒よろしくお願い申し上げます。

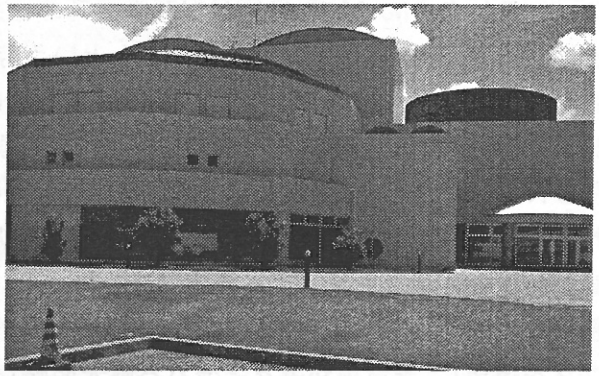
平成18年度事業『鷹島海底遺物を中心とした引き揚げ遺物の保存と活用』

報告　海の日記念講演会

「伊万里湾の海底に歴史を探る～海に眠る元寇の跡」

文化財保存支援機構では、平成17年度より日本財団の助成を受け、長崎県松浦市鷹島海底から引き揚げられた、元寇（蒙古襲来）遺物の保存処理事業を推進しています。(NLNo.12参照）その一環として毎年７月に「海の日記念」講演会およびイベントを開催しています。


講演会会場風景


松浦市文化会館外観

今年は松浦市教育委員会が中心となって「伊万里湾の海底に歴史を探る～海に眠る元寇の跡」と題し、長崎県松浦市文化会館に於いて、７月８日（土）９日（日）両日に遺物展示、９日に講演会を行いました。また去年に引き続き、元興寺文化財研究所のご協力により、同研究所の文化財診断車に出動していただき、文化財分析のデモンストレーションを行っていただきました。

９日の講演会は、三輪嘉六　文化財保存支援機構理事長（九州国立博物館長）、根元謙次　東海大学海洋学部海洋資源学科教授、鳥越俊行　九州国立博物館　博物館科学課研究員３名に講師をお願いし、それぞれ違う角度から、水中考古学、遺物保存の重要性について講演していただきました。

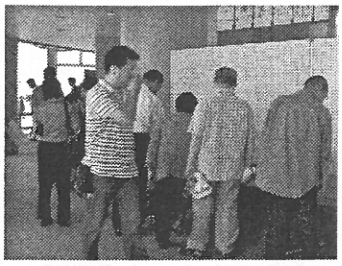
松浦市文化会館は松浦鉄道（MR）松浦駅のすぐそばとは言え、このMRが30分に１本。博多駅からで

も、有田、伊万里経由で約２時間半と大変交通の便が悪いところです。にもかかわらずこの記念行事には、延べ400名の市民が参加。報道機関も数社訪れ、翌日の新聞各紙に報道されました。（写真参照）

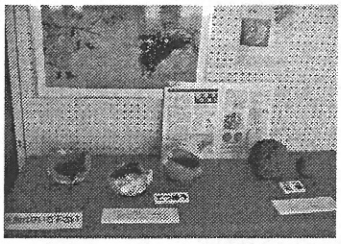
今年の実行委員は実質上松浦市教育委員会の方々で、お忙しいスケジュールの中、全て手配をしていただきました。

ここにご協力頂きました講演者各位、関係機関各位、ご後援を頂きました長崎県教育委員会、九州国立博物館、（財）元興寺文化財研究所、（財）日本財団に厚く御礼申し上げます。また主催者の松浦市教育委員会各位－宮本教育長、神田課長、中田様、木村様、鷹島の山下様、松尾様、本当にお疲れ様でした。

今後とも「海の日」記念行事が定着し、広く市民の間に鷹島海底遺物の重要性が認識され、水中考古学が発展していくことを願っています。



訪れた見学者



「てつはう」の展示

長崎新聞

元寇発掘資料 活用を

海底遺跡テーマに講演会

松浦

講演会の様子を伝える地元紙

保存修復の現場から

生産環境を整えないと綺麗な物はできません

志村　明さん

（絹織製作研究所）

ニュースレターNo.11で、染織品保存修復師の石井美恵さんを取材したとき、古い布を研究している志村明さんという存在を知りました。石井さんに志村さんが試験的に作成した絹のサンプルを見せていただき、興味をそそられた筆者が誌上で取材宣言をしてしまったところ、事務局からＯＫが出てさっそく取材に伺うことに。新宿発の中央高速バスに揺られること約３時間半。長野県の飯島バス停に降り立つと、志村さんご自身がわざわざ車でお出迎えくださいました。

長野県の南に位置する飯島町は、西に中央アルプスを望み、東に南アルプスを遠望し、天竜川が蕩々と流れる風光明媚な土地です。志村さんによると、冬の寒さもそれほど厳しくなく、雪は降っても積もることは希とのことです。伺ったのは８月の夏真っ盛り。折しも好天に恵まれ、車窓から目にする山々は眩しいばかりでした。

町から車で走ること約10分の仕事場に案内していただいて、早速お話を聞くことに。今の言葉で言えば「目力（めぢから）」のある方だなという印象。そこで伺った話は、なかなか驚かされる内容で、いやはや、世の中には知らないことがたくさんあるものだな、と思った次第でした。

※取材の内容をより理解できるように、コラムとして近年における養蚕の歴史を簡単にまとめました。そちらを読んでいただいた上で、本文を読んでいただければより理解が深まると思います。

沖縄で養蚕？

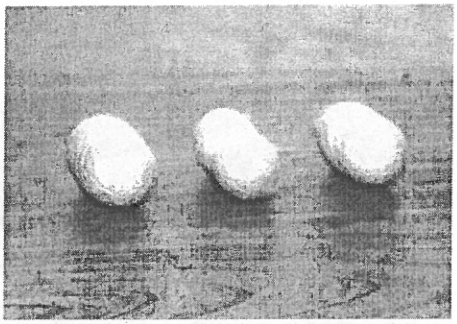
志村さんが養蚕に携わったのは約30年前、沖縄県の竹富島でのことでした。当時の沖縄は本土復帰してまもない時期で、様々な救済措置が執られていました。そのため蚕に関しても蚕糸業法・製糸業法の適用外になっていました。

「そのため、いろんな蚕を飼うことができて結果ラッキーでした」

でも、竹富島で養蚕？　沖縄といえば芭蕉布というイメージですが。

「それは絹の方が簡単だからです。１反分の糸を紡ぐのに絹だと５日、芭蕉布だと約１ヶ月かかります。

それに絹の方が高く売れますし（笑）。ただ沖縄はいい糸はできるんですが、絹を着用するには適していない気候なんです」



その後、沖縄で18年ほど過ごした後、愛媛県で10年。その後この飯島に仕事場を移して４年ほど経ちました。ここは元々養蚕が盛んなところで、今現在も養蚕農家が生産を続けているところです。

「この場所を選んだのは、作業する環境が優れているからです。人が気持ちよく作業できなければ美しいものはできません。それに各養蚕農家が誇りを持って繭を生産しています」

技術は継承されていない

繭から織物まで手作業での一貫生産というメリットから、ごくたまに文化財等の復元のための布作りを頼まれることもあり、それがきっかけで「文化財に関わる絹織物」という考え方をするようになりました。ところが、誰も絹の素材に対しては無関心だという現実に突き当たります。染織品の色や模様の復元には力を入れますが、肝心の素材が工業化された絹糸を使っているために、風合い等が違った物に仕上がってしまいます。

何故そうなるのかと言えば、コラムにあるように、明治以降の日本の養蚕は法律で縛られていたからです。生産できる蚕の種類は、国が指定した生産性の高い品種のみ。当然食べる桑も同じものになります。原料自体の多様性も失われてしまいます。伝世品と同じ素材は、望んでも手に入れることができません。他の伝統工芸品と違って、江戸時代までの絹生産の技術は一度滅び、現在には伝わっていないと言えるようです。

復元した織物が、実は当時のものと違う糸で織られているとなると、最近あちこちの博物館で行われているような、「さわってみよう」という感触に訴える展示をした場合、違った風合いのものが展示されることになってしまい、何のための展示か分からなくなってしまいます。

「能のことを考えると、演目と衣装は伝統的に決まったものになっています。古い衣装は残されていて、ある演目を演じる場合に、新たにそれと同じ型の衣装を織り上げるわけですが、その場合は機械で作った絹糸を使います。そうすると、風合いも重さも過去に製作された物とは全く違ったものになってしまいます。物によっては10倍くらい重くなってしまう。装束の形であるなどは守っているけれど、質までは伝えていない。演者はやりにくさが分かっているんじゃないかと思います」

そうなると、能はもっと軽やかに演じられた物だったのかもしれません。十二単衣ももっと軽い物だったと考えれば、かなりイメージが変わってきます。

法律によって規制され、規格品しか手に入らない時代なら、絹そのものの組成等を考慮する余地がなかったのかもしれません。もし、その文化財と同じ織物を作るため、蚕の種類も変えて製作したなら、それは企画から外れ、違法行為になってしまうからです。ところが、規制緩和によってその枠は撤廃されました。素材としての絹の研究を行える時が来た、と言えるかも知れません。

明治以降の養蚕業

カイコ（蚕）はチョウ目（鱗翅目）に属する昆虫の一種。正式和名はカイコガで、カイコはこの幼虫の名称だが、一般的にはこの種全般をも指す。桑を食餌とし、絹を産生して蛹の繭を作る。カイコは家蚕（かさん）とも呼ばれ、野生に生息する昆虫ではない。カイコは人による管理なしでは生育することができない。５齢になると繭を作る準備にはいる。

蚕が繭を作った後、サナギが生きたままの状態で糸を紡ぐのを生繰りという。７日間塩漬けにしてサナギを殺して風乾させたものを塩漬け法という。生繰りは短期間の勝負なので、より上質なものとされる。

記紀にも記述があるように、我が国の養蚕の歴史は古い。かつては、各地で様々な種類の蚕から様々な手法で糸が紡がれ、織られてきた。律令制の時代には、租・庸・調の「調」に当たるのが絹を始めとする繊維製品の納入義務であった。その後、各藩の特産物の一つとして、農家の副産業として発展を遂げてきた。江戸期の貿易における日本の輸出物の大半は、絹織物であった。そして、現在我々が博物館　美術館で観るものは、ほとんどがこの時代の繊維である。

ところが明治になると、生糸の生産は外貨獲得の手段として、国策となる。工業製品化した絹織物は、一定のレベルを維持する必要があり、蚕糸業法や製糸業法という法律によって管理され、蚕の品種、飼育、販売等を激しく規制されていた。宮内庁管理の小石丸という日本種の蚕は、例外といえる。

糸の取引は重量で行うから、重いほど生糸生産者には有利になる。蚕の品種改良は、そのニーズに適したものを作り出すことに重点が置かれた。その結果、絹繊維がすぐ擦り切れたり、絹が重くなったりという弊害を生む。

近年の規制緩和によって、３年ほど前にこの蚕糸業法、製糸業法は廃止されたが、依然として売買は農協を通す必要があるなど、自主的な流通ができない状態にある。また、国策としての生糸生産はとっくに無くなっており、現在の養蚕業はほとんど壊滅状態と言っても過言ではない。国も産業としての助成等は行っていない。

かつては織物の製作まで一貫して作業が行われていた所もあるが、現在の養蚕農家は繭作りまでの生産者で、製糸工場に繭を納める。ただし、現在ある製糸工場はただ２社のみになってしまった。

修復技術者は劣化した絹を新たに織った絹で補修することに、多少なりとも疑問を感じています。そこで油剤（シャンプーとリンスと考えれば分かりやすい）を使ったり放射線を使って強制劣化させた絹（装こうでは使うことがある）を使っています。でも、そろそろ化学的処理以前の問題として、絹糸そのものに目を向けてもいいのではないでしょうか。

すべてはこれから

古い時代の絹は、美しさと強さを併せ持っています。時代を経るに従って強さは失われてきました。国宝　天寿国繍帳残欠を見ても、ちゃんと残っている部分は奈良時代の物で、ボロボロになっている部分は鎌倉期に修復した箇所です。

絵具や紙などはある程度、分析によって時代や素材等が分かるようになりました。絹に関してはどうなんでしょう。

「実は絹の分析法すらまだ分かっていないんです。日本・中国どちらで織られたのかも分からない。劣化のメカニズムも分かっていない」

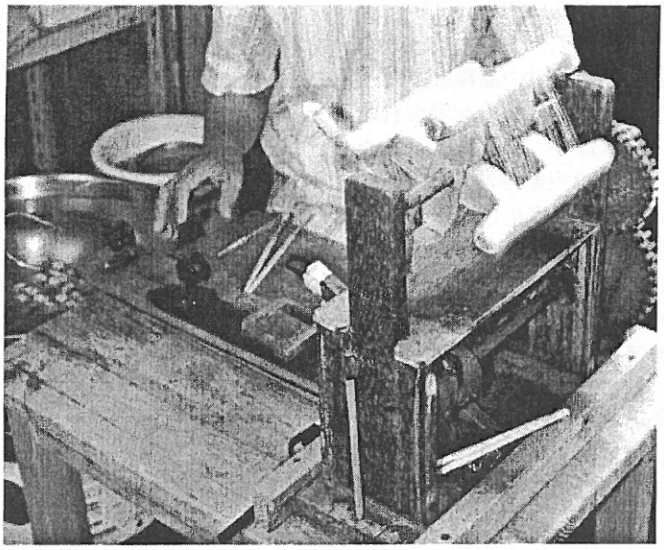
ちょっと驚きました。古い着物にしろ絵絹にしろ、分析法すら分からないとは考えてもみないことでした。一度技術が途絶えると言うことは、こういうことなのです。どうにもならないのでしょうか？

「絹糸の紡ぎ方や織り方は時代によって変化しています。それを調べるには、絵絹を分析していけば分かるようになるのではないかと思います。絵絹は作られた時代が分かり、そのもの自体が残されているからです。約2500年を連続して見ることが可能です」

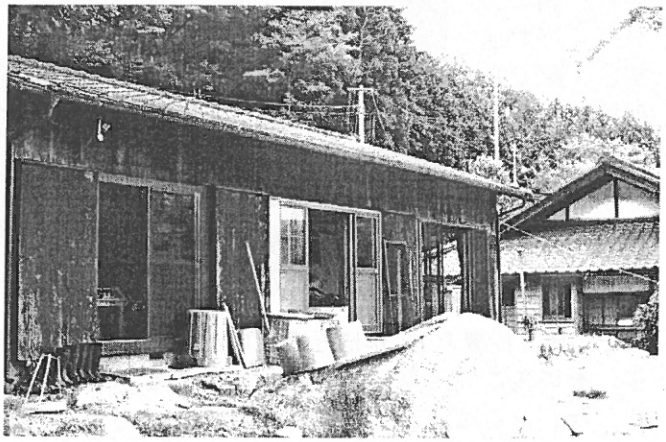
標準資料もない、手探りの状態ですが、今後に期待しましょう。

今だからできること

布を織る織機という物は、時代時代で改良されてきました。しかし、郷土資料館等にある物はかなり新しい織機ばかりだそうで、古い時代にどのような織機で織られていたかは、分からなくなっているそうです。改良によって、確かに効率は上がりました。糸も機械で紡ぎ、どれも同じような物になりました。ところが、志村さんの作る糸はとても同じものには見えません。手触りも違います。鬼縮（オニシジラ）という品種のみから、どうしてこのように多様な糸が紡げるのでしょう？　手繰りの様子を見せていただくと、ほんの少し操作の仕方を変えただけで、1つの道具で何通りもの糸が紡がれていきます。目的に応じた手作業がここにはあります。



手動の糸繰り器で様々な糸を紡ぐ



素晴らしい環境の中から美しい絹を作り出す

「昔はそれしか方法を知らなかったから出来たのでしょう。今は新しい物を知っている分、昔のやり方に戻れない不都合さがあります」

昔のやり方で作業をすることで、出来上がりに歴然とした差があれば付加価値が付くのでしょうが、絹の場合は見た目にはそれほどの差が出てきません。しかし、100年後、200年後にどのような差ができているか、誰にも分かりません。

「逆に今の時代は、古い物を意識して見ようと思えば見られるんです。戦前だと特定の研究者以外見られなかったと言う事実があります。でも、今の我々は本当に綺麗な物を見ようと思えば見られる。これは凄いことだと思います」と、志村さん。

そして先ほどから言っている規制緩和です。今後研究が進んで、蚕の種類まで特定できるようになれば、今なら伝世品と同じ裂を、合法的に織ることができる可能性もあります。

今だからこそのプラス面もあるんだなと考えさせられました。有効に使わないともったいない。

環境作りの大切さ

現在、志村さんの元には3人の若い女性が絹織物作りに取り組んでいます。

「昔は一人前になるのに10年掛かるといわれましたが、そうではないと思います。自分が作りたいと思う物と同質の環境があるか無いかという問題なんです。環境がありさえすれば、物は作れる」

元々沖縄では絹の生産自体がなかったため、環境を整えるのに10年掛かったそうです。「一人前になる」と言われていた年数と妙に符合します。整った環境下で、その魅力等を具体的に示せば、若い人も

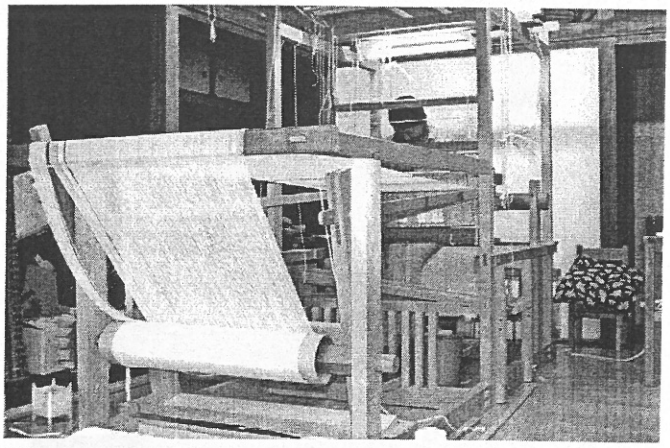
あっという間に進歩するそうです。

古い農家の家屋に手を入れた織機の作業場もすばらしい環境にあり、気持ちよく作業ができそう。

「綺麗な物を作っているんですから、綺麗な所じゃないと。劣悪な環境では綺麗な物はできません」

最近は徐々にではありますが、志村さんの考えに賛同する修復技術者も増えつつあります。時間は掛かるでしょうが、これも環境作りの一つかもしれません。

実際にお会いしてお話を伺うと、養蚕業や絹織物の現状を憂いつつ、自分の仕事を着実に進めようという、強い意志の方だなと思いました。しかし、志村さんにとって、文化財修復用の絹という物はあくまで研究成果の一つに過ぎなくて、本当は絹という美しい織物が大好きで、「より綺麗な絹織物」を作りたい一心で仕事に打ち込んでいるのではないかな、と思った次第です。　（嶋根　隆一）


機織りも心を込めて織られていく

「こだわりの道具紹介④」

冷凍庫で殺虫処理

～家でもできる簡易低温殺虫方法～

資料館や博物館で新しく購入した資料／史料などを収蔵庫に入れる際には、まず隔離スペース（プラスチック袋でも良い）に収納して、生存虫を調査し、さらに１年間ほど隔離を続けて、新たな虫の発生が無い事を確認する必要があります。１年以上、隔離する事が出来ない場合には何らかの方法で虫や黴を駆除してから収納します。特に虫は、一匹でも生きたまま文化財と共に収納してしまうと、収蔵庫内で増殖し、健全だった文化財にまで被害を広げてしまいます。

最近オゾン層の破壊問題などで、燻蒸に使用できる薬剤が制限され、代替法として「低酸素濃度処理」「二酸化炭素処理」「高温処理」「低温処理」などが行われていることは、いろいろな機会でレクチャーが行われているので、皆様よくご存知のことと思います。

Seavoチェストフリーザー SE-100

しかし窒素や二酸化炭素を扱う場合は、人体に影響をおよぼすため専門家に依頼しなければならず、それなりの施設も必要です。また、脱酸素剤を文化財とともにシーリングする方法は、密閉度をかなり上げなければならず、しかも高温（約30℃）下で３週間ぐらいの処理期間を必要とします。

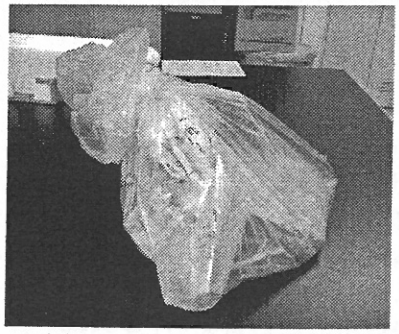
民間の工房で古い文書や書籍などを受け入れる場合、手軽で確実な殺虫方法はないのでしょうか？

昭和女子大学大学院で文化財保存学を教えていらっしゃる増田勝彦教授に、以前冷凍庫を利用した低温殺虫についてお話し頂いたことがありました。その具体的な方法を、今回はご紹介したいと思います。

増田先生が利用しているのは、釣り道具屋などで売っている釣魚保存用の冷凍庫。Seavo というメーカーのチェストフリーザー（SE-100）です（W557mm × D578mm × H852mm）。このSEシリーズ、容量は66リットル～３２０ リットルまでのバージョンがあります。（URL:http://www.seavo.jp/se.html）冷凍庫選びのポイントは、虫が死ぬとされている－４０℃まで冷却できるかどうか。このフリーザーは、外気の影響を受けやすいので、屋外など直射日光が当たるところでは－４０℃は保証できないとのことですが、室温に気を使えば十分目的を果たしてくれます。増田先生は、このフリーザーを60，000円ほどで購入したとのことです（標準小売価格168，000円。ネットでの販売価格63，000円）。

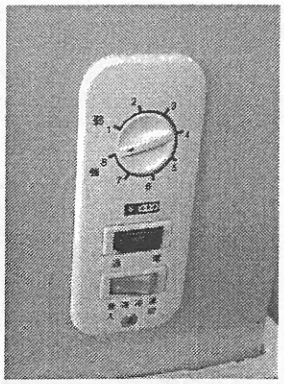
さて、そのレシピは。

①まず殺虫処理したい紙資料※1を薄葉紙で個々に包み※2、ポリエチレンの袋など（ゴミ袋でOK）に入れてしっかり封をし、フリーザーの中に入れます。紙に吸着されている水は凍りませんが、袋の中の空気に含まれている水蒸気は、低温になるに従い袋内面などに結露し、やがて霜となります。文書などの文化財を薄様紙で包まない場合には、この結露が文書表面などで起こる可能性があり、また袋内面の霜が溶けた水で濡れてしまうことが起きます。その様な現象を防ぐには、薄様紙で包む


この状態でフリーザーに入れる

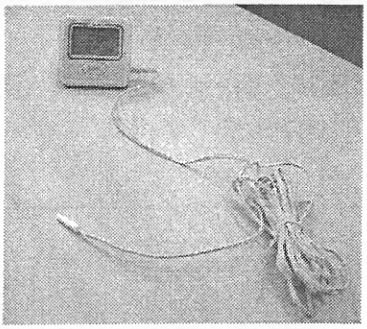
事が有効です。

②そして－40℃まで急速冷凍※3。Seavoのチェストフリーザーには急速冷凍スイッチが付いていて、とても便利（写真）。庫内の温度はコードの先にセンサーをつけた温度計で観測します※4（写真）。センサーは、資料と資料の間に入れ、内部までしっかり温度が下がっていることを確認できるようにします。



急速冷凍スイッチ

③温度が－40℃まで下がったらそのまま1週間（文献※5では5日を推奨）。



センサー付き温度計

④冷凍スイッチを切り、内部が室温にもどるまで待ちます。この時慌てて袋から出すと、紙に結露して濡れの原因になります。

⑤用心のために一晩おいて翌日資料を取り出し、できあがり。

薄葉紙で包んだ資料をさらに袋に入れる。資料と資料の間に温度計のセンサーを挿入する。

資料が凍らないか？　と心配される向きがあります。増田先生によると、確かに紙にもわずかな水分が含まれているそうですが、繊維の表面に吸着されているので凍らないとのこと。通常の環境に保存されていた紙繊維表面の水分は－50℃にならなければ凍らないので、安心とのことです。

この方法のメリットは、

①通常の室内で場所を取らずに行えること。

②処理期間が比較的短いこと。

③脱酸素剤のように厳密なシーリングをしなくても大丈夫なこと。

④費用が安く済むこと（運転時の電気代だけが必要で、日常のメンテナンスが不要、薄様紙、プラスチック袋などは再使用可能）。

⑤準備が不要（プラグをコンセントに差し込めば即使用可能）。

などが挙げられます。

注意点としては、先述したようにある程度の室温管理が必要であること（人間に快適な室温なら大丈夫）。

処理できる材質が限られるので確認すること※1、などです。

また、これはすべての殺虫方法に言えることです

表 5.4　薬剤を用いない殺虫法について

処理	適した用途	材質への影響	殺虫効果	殺置効果	人体への安全性	備考	対象
低酸素濃度処理（窒素，アルゴンなどの不活性ガス）	全般	ほとんど影響しない．ただし湿度，風圧には注意	○～△ 木材深部などに適用しにくい対象あり	×	○～△ 酸素濃度が 1.8 % 以下になると危険	処理期間：1～3 週間（室温の場合はより長時間）	文化財
低酸素濃度処理（脱酸素剤）	全般	脱酸素剤の種類によっては悪影響を及ぼすものがあるので，文化財に適したものを使用する．種類，使用量，設置法に注意	○～△ 木材深部などに適用しにくい対象あり	×	○	処理期間：1～3 週間（室温の場合はより長時間）	文化財
二酸化炭素処理	民具（衣装，木製品，わら製品，竹製品など），その他	きわめて高湿度になった時に，一部の金属，一部の顔料粉体に変色．その他は，大きな影響は報告されていない	○～△ カミキリムシなど一部の木材害虫は耐性が強い	×	△ 二酸化炭素濃度が 1.5% 以上になると危険	処理期間：1～2 週間（室温の場合はより長時間）	一部の文化財
低温処理（－20～－40℃）	書籍・古文書・毛皮・織物の一部，動植物標本，木製品（単体）	一般に左記以外は適用困難	○	×	○	処理期間：－30℃で 5 日程度，－20℃で 2 週間程度	一部の文化財
高温処理（50～60℃）	建造物，木製品，乾燥植物標本，資材など	一般に，左記以外はあまり適用されない	○	△ 胞子は生存	○	処理期間：数時間－1 日	一部の文化財，資材など

○：高い　△：場合によっては低い　×：低い，あるいはまったくなし
文化財害虫事典（2001）[3] をもとに改変（2003 年 3 月現在）

表1　朝倉書店『文化財保存環境学』P.112より

が、虫には卵から孵って成虫になり、また卵を産むというサイクルがあります。卵の時にはある程度耐性がありますので、幼虫、成虫の季節に処理をすることです。時期については種類によって違いますが、成虫化するのは5月～6月が多いようです。※5

また、この方法では黴は殺せませんのでご注意下さい。ただ、黴の増殖を一時的に止めることはできます。当機構でも水害にあった資料の救援活動を行ったことがありますが、暑い季節ですと黴がどんどん増殖して腐敗臭を放ってきます。体制が整うまで腐敗の進行を止める保管方法としても、大いに注目できる方法だと思います。

この記事に関する、ご意見、ご質問は事務局まで。

また、こんな機材、道具が現場に役立つ、というお勧め情報がございましたら、是非ご一報下さい。

（八木三香）

※1　低温殺虫が適した文化財の材質は、書籍、古文書、毛皮、織物の一部、動植物標本、木製品（単体）などです。（東京文化財研究所編『文化財保存環境学』P.112より）→表1

※2　薄葉紙が、表面の結露を吸収してくれます。

※3　フリーザー内を設定温度に冷却してから資料を入れる場合、フタ周りに霜が付き易く、一般的な冷凍庫ではそこから冷熱がもれて、温度が下がらないことがあったそうです。そこで、資料を入れて、フタをきちんと閉めてから急速冷凍スイッチをいれることをお勧めするとのことでした。

※4　増田先生御使用の温度計は、SATOのMODEL PC-3500。センサーが先に付いている長いコードを装着することができるので、庫内の資料の間にセンサーを挟みこみ、庫外から内部温度を観察できます。東急ハンズなどで、3,000円前後で購入できます。

※5　東京文化財研究所編『文化財害虫事典』（2001年クバプロ発行　5,000円+税）、三浦定俊、佐野千絵、木川りか著『文化財保存環境学』（2004年朝倉書店発行　3,600円＋税）が参考になります。

JCP事務局通信

1．　貴方の投稿をお待ちしています。

NPO JCP NEWS 編集部では、会員の皆様の投稿をお待ちしています。

文化財に関する身の回りの出来事、日頃考えていること、お困りごと、また本誌へのご感想やご意見でも結構です。

400～2,000字程度。住所、氏名、年齢、電話番号を明記の上、

〒110-0008 台東区池之端4-14-8 ビューハイツ池之端103号
特定非営利活動法人　文化財保存支援機構　事務所　までお送り下さい。

ファックスの場合は、03-6770-1683。

メールの場合は　jimukyoku@jcpnpo.org まで。

皆様のアイディアや、ニーズを汲み上げる契機になればと思います。

2．　平成18年度　月例交流会のお知らせ

Ⅰ.「タイの仏教遺跡の魅力～その保存と活用～」

○講師：西浦忠輝先生（国士舘大学教授）
　　友田正彦先生（文化財保存計画協会）
○日時：平成18年10月21日（土）
○講演：13：30～15：30
○タイ国　スタディツアー事前説明会：15：30～16：30
○場所：桐杏学園（〒171-0021　豊島区西池袋5-4-6
　　東京三協信用金庫ビル　TEL；03-3982-0191）
○アクセス：池袋駅西口から徒歩約4分
　　（C2出口を上がって徒歩1分）
○参加費：NPO JCP 会員：1,500円／非会員：2,000円
　　スタディツアー参加者：500円（資料代）
○申し込み：
電話（03-6770-1682）、ファックス（03-6770-1683）、E-Mail：jimukyoku@jcpnpo.org にて、お名前、ご連絡先、会員／非会員をお知らせ下さい。

Ⅱ.「文化財の虫菌害対策の段階的プログラムについて～状況／環境に即した対策法～」

○講師：木川りか先生（独立行政法人　東京文化財研究所）
○日時：平成18年12月9日（土）　13：30～16：00
○場所：未定
○内容：臭化メチル全廃から1年。文化財の燻蒸や、収蔵庫、保存箱に使用する防虫剤／防黴剤は、いったい何をどのように選択したらよいのでしょうか？

一般所有者のみならず、博物館、美術館など現場を抱えている担当者の方でも分からないことだらけです。

今回は、東京文化財研究所保存科学部主任研究員の木川りか先生に、具体的で現場に即したIPMについてレクチャーして頂きます。

学芸員、保存担当者、修復技術者、必須の講義内容です。
○参加費：NPO JCP 会員：2,000円　非会員：3,000円
○申し込み：
電話、ファックス、E-Mailにて、お名前、ご連絡先、会員／非会員をお知らせ下さい。

NPO 文化財保存支援機構（担当／八木）
TEL. 03-6770-1682　@FAX. 03-6770-1683
E-mail：jimukyoku@jcpnpo.org

書籍紹介

宮内庁書陵部

「古典籍の装幀と造本」デザイン製本③

吉野　敏武　著　印刷学会出版部
2006年5月25日発行　定価：1,600円＋税　176頁　A6判

最近、古文書を読むことが静かなブームらしい。それらに関連した本が初心者向けから専門家向けにかけて幅広く出版されている。

今回紹介する『古典籍の装幀と造本』の著者吉野敏武氏は、宮内庁書陵部において長年宮内庁が所蔵している貴重な古典籍の修理に携わってきた方である。そして、修理とともに装幀や料紙の研究を行ってきた吉野氏が、それらの蓄積の上から、製本術について書いた本である。

この本は、大きく2章から構成されている。

・古典籍の装幀の変革
・装幀形態と成巻および製本方法

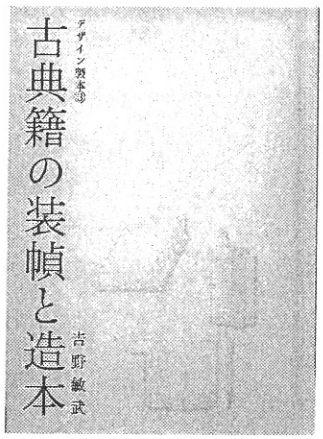
まず、装幀や使われている紙（料紙）の歴史についての述べられている。そして、巻子本（かんすぼん）、折れ本（おれほん）、粘葉装（でっちょうそう）、大和綴（やまととじ）、線装本袋綴（せんそうぼんふくろとじ）の5種類の製本方法が図版とともに解説され、最後に製本で使用する道具についても触れている。

題名や目次を見ても何と読めばいいのだろうか分からないような言葉が並び、すごく難しい本のような感じがするが、装幀の形態、時代による変遷や製本方法が丁寧に説明されて、読んでいくと吉野氏のこだわりが随所に感じられる。

また、和本を作ることを前提にした解説と図版になっていため、外側だけからでは分かりずらい、和本の構造がつかめてくる。

まずはこの本で予習をして、展覧会などで古典籍の作品を鑑賞すると、作品を正面から見て文字の形や内容を追うだけではなく、装幀の形を確認しながら、隠れている構造に思い巡らせ、ワンランク上の作品の見方ができるかもしれない。作品を少し斜めの方向から、または少々かがんで小口部分を見たりと、古典籍への楽しさが増えると思う。また、鑑賞後に本を読んで再確認をする。予習復習ができる本だと思う。

もしかしたら、自分で和本を作りたくなるかもしれない。



今回紹介した本はデザイン製本シリーズの5冊の中の1冊である。

「本」という単語で何を想像するだろうか？　「本」のイメージやこだわり方もそれぞれ異なるだろう。このシリーズは、本の中身ではなく、本の形に視点をおいている。洋本、和本の歴史、製本、デザイン等々。

シリーズを読むと、今まで何気なく読んでいた本も思わず手に取り、製本方法を確認してみたくなる。

本の需要や素材の変遷などで、装丁や製本技術は発展していき、失ったものもあれば、新しい技術が開発され、本1冊の中にこんなにもいろいろな歴史やこだわりが詰まっていたのかと奥深さを感じる。

このシリーズは堅苦しい本ではなく、A6判の文庫本サイズである。ただし上製本で厚く堅い表紙がついて、ちょっと豪華な本である。

著者のこだわりと編集者のこだわりがそれぞれ感じるシリーズ本である。

デザイン製本シリーズ
①『デザイナーと装丁』　小泉弘著　1,800円＋消費税
②『製本探索』　大貫伸樹著　1,800円＋消費税
今後の刊行予定（書名は仮題）
④『デジタル技術と手製本』　坂井えり著
⑤『西洋の製本の歴史』　岡本幸治著　　（三浦功美子）

ご入会ありがとうございました。

（平成１８年９月１０日現在入会者数）

□理　　事　6名　　□維持会員 13名

□登録会員 154名　　□一般会員 98名

□賛助会員　28件
（株）宇佐美松鶴堂
（株）岡墨光堂
（株）和蘭画房
桂文化財修理工房
（財）元興寺文化財研究所
（株）京都科学
京都造形芸術大学　歴史遺産研究センター
（有）黒田工房
（株）芸匠
（株）光影堂
有限責任中間法人　国宝修理装こう師連盟
（株）坂田墨珠堂
（株）修美
宗教法人　正法院
靖斎文化財保存研究所
日本通運株式会社　美術品事業部
長谷川和紙工房
（株）半田九清堂
百元　節
（株）フレンドトラベル
（株）文化財保存
（有）文化財修復技術研究所
溝川商店
山領絵画修復工房
他個人４名
（アイウエオ順　敬称略）

NPO JCP の活動に参加してみませんか？

□ **登録会員**：年会費　7,000円
文化財保存に関わる専門的技能を持ち、プロジェクト遂行に協力する個人。
登録会員は文化財の保存事業を行うための専門家で、文化財に直接関わる専門家とは限りません。

□ **一般会員**：年会費　5,000円
この法人の目的に賛同し、支援する個人。

□ **賛助会員**：年会費　一口50,000円
この法人の目的に賛同し、支援する団体、個人。

会員特典　季刊情報誌の送付
講演会／研修会等への優先参加

※入会ご希望の方は、下記のファックス、お電話、メールにて申し込み用紙をご請求下さい。おり返し資料をお送りいたします。また、ホームページからでも入会申し込みができます。
TEL. 03-6770-1682　FAX. 03-6770-1683
E-mail: jimukyoku@jcpnpo.org
URL:www.jcpnpo.org

※この他にも、随時寄附を受け付けております。下記の郵便振替、あるいは銀行口座をご利用ください。

・**郵便振替**　00120-4-10545　NPO JCP
・**三菱東京UFJ銀行**　四谷三丁目支店
普通預金　3960340
特定非営利活動法人　文化財保存支援機構
理事　三輪嘉六
・**みずほ銀行**　根津支店
普通預金　1727893
特定非営利活動法人　文化財保存支援機構

編集後記

●ふと気がつくと蝉の声が聞こえなくなり、秋の虫の大合唱。季節の移り変わりは早いものです。ところで、私の夏休みはどこへ行ったのでしょう？　どうやら今年は見なかったようです。飯島に行けたのがせめてもの幸いでした。日帰りは可能なんですが、もったいない。駒ヶ根の元祖ソースカツ丼は美味でした。（嶋）

●大変お待たせいたしました。今年度漸く２号目の発行です。今年の支援機構は、なんとなく静か……と思われているかもしれません。いえいえ、今年はまだ始まったばかり？　11月にはタイツアー、来年２月には九州国立博物館と大イベントが続きます。関西支部も立ち上がり、月例会も充実させていく所存です。ともかく一度、ご参加下さい。楽しいですよ。(M.Y.)

NPO　JCP　NEWS
第14号
2006年9月10日発行
特定非営利活動法人　文化財保存支援機構
〒110-0008
台東区池之端4-14-8 ビューハイツ池之端103号
TEL:03-6770-1682　FAX:03-6770-1683
E-mail: jimukyoku@jcpnpo.org
URL: www.jcpnpo.org

〈理　事〉
三輪 嘉六（理事長）
大林 賢太郎（副理事長）
西浦 忠輝（副理事長）
伊原 惠司
白井 久明
増澤 文武
〈事 務 局〉 八木 三香（事務局長）
松本 洋子
〈編集協力〉 嶋根 隆一（伝世舎）